イラン短期研修プログラム報告書

大阪大学外国語学部ペルシア語専攻４年
岩倉如月

1.はじめに

１年ぶりのイラン。エスファハーンでの留学当時、ヘジャーブ着用問題を巡ってイラン国内でデモが始まり、広がっていく様子を間近で見ていた。最近もイラン人歌手がデモを扇動した等の罪で禁錮刑を受けたというニュースが報じられ、あれから１年以上経過した現在も、ヘジャーブ問題は国際的な関心事として取り沙汰され、世界を駆け巡っている。

2. 改革と安定

SIR での講義から、「普遍性 Universality」と「特殊性 Particularity」のバランスが「安定と改革」の鍵であることを学んだ。イランでは、その時代の指導者によって国の政策が一変する改革がおこなわれてきた。国内の団結と独自の体制の強化を求めようとする政府に対し、不信感とジレンマを持った市民との間に齟齬がある。「安定と改革」のバランスが国内で上手く保たれていないのではないか。ヒジャブ問題はこの先も耳にすることになるだろうし、イランは変革期を迎える重要な局面であると考える。

2. 日本への関心

国立図書館、蔵書の修理工房、議会附属の博物館を訪れた。イランの博物館では、日本からイランへの贈呈品を鑑賞し、両国の古くからの友好関係を再認識した。また、人々が自国の歴史・文化に対し、高い敬意と強い誇りを持っていることを体感した。

さらに、国内外のスタートアップがオフィスを構えるテクノロジーパークを訪問し、第一副大統領が管轄するパークの歴史、現状、展望についての話を伺った。イランにもシリコンバレーのような地区があることを知り、イランの市場価値の潜在能力の高さに驚いた。

IPIS(イラン外務省附属国際問題研究所)主催の夕食セレモニーでは、モハンマド・ハサン・シェイホルエスラーミー外務次官が、「2003 年のバム地震での日本政府の復興支援に感謝し、その気持ちを忘れず、今後も日本と良好な関係を築いていきたい」と述べられ、イランの日本に対する期待を直接感じることができた。

3. まとめ

テヘラン平和博物館を総括するシャフリアール・ハーテリーさんに、「戦争をなくし平和を追求するために、外交に何を期待しますか？」と質問したところ、彼は「個人ができる平和活動を行い、“全ての人間は皆同じ人類であることを忘れない”姿勢が重要だと思っている。」と答えた。その言葉は、私に SIR の講義で学んだ「普遍性 Universality」を再び想起させた。そして、イラン企業の市場規模や価値の大きさ、また教育水準の高さ、日本に対する期待感を知る中で、日本の「特殊性 Particularity」を模索していきながら、より国際社会での存在感を高めていく必要性を感じた。

先程のシャフリアール・ハーテリーさんは上記のように答えた後、「あなたはどう思いますか？」と私に聞き返した。私はこの問いに対する明確な答えを見出せていない。自らも「特殊性 Particularity」を磨きながら、答えを模索し続け、国際社会での貢献を目指していきたいと思う。

ニュースや書籍では得られない生きた情報や、外交に携わる人々の価値観、研修を通して培った新たな視点は、非常に貴重な

ものであると感じている。このような機会を与えてくださった笹川平和財団の皆様、現地関係者の皆様、SIR 関係者の皆様、イランで出会った方々、研修のメンバー、研修に関わったすべての方々に心から感謝申し上げます。

（なお、本所感は執筆者個人のものであり、笹川平和財団の見解を示すものでありません）